

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02591

研究課題名（和文）日英語の程度表現の統語構造と意味

研究課題名（英文）Syntax and semantics of degree modification in English and Japanese

研究代表者

渡邊 明（Watanabe, Akira）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：70265487

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：これまで日本語に限らず他の言語においても詳しい研究がなされていなかった程度変項の全称量化の性質を、否定極性や自由選択の観点から取り上げるという最大の成果に加え、指示詞が量的意味を表現するために使われる場合の構造や、サイズ表現が程度修飾において果たす統合的役割の解明など、新規の研究領域を開拓することに成功した。個別言語の個別語彙項目の特殊性として従来片付けられていたような事柄を普遍文法の観点から分析していくことの意義も示すことができ、あらたな研究の方向性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
あらたな研究対象が日英語の程度修飾表現をめぐる豊富に存在することを示すことで、この分野の研究を刺激し、また、これまでに研究が集中していることだけに興味を持つのではなく、全くあたらしいトピックを創出していくことの重要性にも注意を向けさせることができた。

研究成果の概要（英文）：This project has shown that Japanese has an expression for universal degree quantification, the properties of which have not been investigated in detail in any language before. Furthermore, the project has brought to light the structure involving demonstratives that is used to express quantity, as well as the integrative role played by size predicates in various aspects of degree modification. Overall, the results obtained indicate the significance of approaching relevant individual lexical items from the perspective of Universal Grammar, presenting a new direction for future research.

研究分野：人文学

キーワード：生成文法 自然数 程度の全称量化 指示詞と量的意味 量的関係節 サイズ修飾 比例量化子 計量単位語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

科学研究費助成事業 研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

Kennedy や Lechner の一連の成果を契機として、今世紀に入り、形容詞の統語構造と意味に関する研究が活発化していたなか、程度修飾に関連する構造がどの程度言語間で異なっているかが注目を集めつつあった。研究代表者本人の研究においては、日本語において計量単位句（以下、MP）が形容詞と共起する場合、英語と共通の統語構造に依存しつつも、意味解釈の点において英語には見られないパターンが存在することを指摘し、英語との違いを意味計算の上で同定することに成功したり、MP の一種が関わる年齢表現の日英語比較を行ったりして、日英語における程度修飾の共通性と相違についての成果を積み重ね始めているところであった。

2. 研究の目的

上記の背景のもと、研究が集中している比較級や最上級以外の現象を掘り起こして徹底的な比較分析を行うことで、日英語の程度修飾の構造の全体像をつかむことを最終的な目標に、地道な記述的作業に重点を置いた。

3. 研究の方法

日本語において指示詞が程度表現として形容詞を修飾する場合を足がかりにし、英語を含めた他の言語に見られる程度修飾表現との比較を、単なる翻訳的表現に限定することなく、日本語としてどのような自然な表現が使われるかに注意して行うという形で進める方針をとった。

4. 研究成果

(1) 指示詞による程度修飾に直接つながるものとしては、「これだけの本」のように「だけ」が付属する表現が名詞を修飾する場合の意味解釈と構造についての対応関係が複雑な様相を呈することを、量的関係節との関連で発見した（学会発表 とそれを活字化した雑誌論文）。指示詞プラス「だけ」が名詞を修飾する構造は、難易度など性質についてさしている場合と量をさしている場合のどちらでも使えるのだが、量的意味を持つ場合のみ格助詞に後続する形（例えば「本をこれだけ読んだ」）を取ることができるという意味と構造の対応関係が存在することをあぶり出し、量的意味を持つ場合は、いわゆる量子子のうち「たくさん」のようなものと同列に扱うことができるという成果を得た。これは、「買えるだけのリンゴを買った / リンゴを買えるだけ買った」のような量的関係節の構文と共通の構造であり、Carlson（引用文献）が提案した英語の量的関係節の古典的分析における中心的アイデアのいくつかを現在のより精緻な句構造のシステムに取り込むことで日本語の量的関係節の構文が分析できることも判明した。こうした一連の分析結果は、英語の量的関係節も結局は関係詞節として扱うことができないかもしれないという可能性を浮上させ、その意味合いは大きい。

(2) このプロジェクト最大の成果と言えるのが、程度変項の全称量化が日本語に存在しているという事実の発見である。問題の現象は、「どんなに難しい問題も」のように不定 (indeterminate) 表現が関わり、譲歩節を除けば英語には存在しない日本語の特徴である。日本語に限らず他の言語においても、同種の統語パターンについてのまとまった研究は未だ存在せず、世界初の発見であろう。程度修飾表現に関する言語間の違いを同定することを目指す研究（引用文献）や不定表現についての各言語の特徴をとらえようとする研究（引用文献）においても、この種の現象は全く言及されることがない。当該現象が否定極性や自由選択の性格を帯びる場合について論文をまとめたが（図書）これは和文論文であり、極性や自由選択をこえた重要性を持つものなので、今後、国際学術誌に発表する必要がある。

否定極性や自由選択との関連では、名詞修飾の最上級が英語で類似のデータパターンを示すことがよく知られているのだが、日本語の最上級は英語で見られる用法を欠くという発見も、この研究の副産物として特筆に値する。日本語の最上級が序数詞を使うという特徴に関連していると考えて間違いない。日本語の最上級に欠けている用法は、スウェーデン語において通常最上級と形態上区別されており（引用文献）日本語の特徴はこの区別をさらに裏付けるものとなっている。

(3) このプロジェクトにおいてもうひとつ大きな柱となったのがサイズ修飾に関わる研究である。*big idiot* や *big fan* のような、名詞に内在する程度が、それを修飾する大きさをあらわす形容詞によって示される場合について、「大ファン」など日本語での対応する表現の存在を図書で指摘しておいたが、それがさらに最上級と組合わされる場合に見られる日本語独自の現象を発見した。ある程度の中間報告をしたのが学会発表 であり、それをベースに論文にまとめた図書 では、さらに、量をあらわす「多い」が「大きい」と歴史上関連しているというよく知られている事実や、英語の量子子 *most* に対応する「大部分」という日本語の表現が「大」

を含んでいるという事実が、名詞に内在する程度の意味という観点から統一的に捉えることができることも示した。この研究から浮かび上がってくる特筆すべき日本語の特徴は、程度修飾の意味を表現するには普通の形容詞ではなく「おお」や接頭辞「だい」という形態的に特化した形式に依存するという点であり、本研究では、先行研究（引用文献）で気づかれていなかった程度修飾のためのサイズ表現の普遍文法上の特殊性をあぶり出すことに成功した。

また、英語の量量子 *most* については、引用文献を出発点とする先行研究ではサイズ修飾との関連が全く意識されておらず、本研究は、このいわゆる比例量子（proportional quantifier）の分析に関しても、従来とは異なる、より統一的な視点を提供していることになる。

この研究が単なるサイズ修飾の問題にとどまらないのは、比例量子自体、ひとつの研究領域をなしているからで、それを包摂するような原理が働いていることを示せたのは大きな成果である。日本語の「大部分」については、関連する「一部」や「ほとんど」と共通して、日本語における名詞の可算/非可算の区別に反応する指標となることを雑誌論文でまとめた。英語のような名詞の複数形をもたない日本語に可算/非可算の区別が存在することを疑問視する傾向があるが、これら「部分」に係る表現がその区別を可視化するテストとして使えることは、日本語における名詞分類の研究にあらたな局面がひらかれたことを意味する。例えば、英語の *funds* のような義務的に複数形をとらなければならない名詞（引用文献参照）が日本語にも「資金」のように存在することが一連のテストによって判明した。このような名詞分類上の区別がこれまで考えられている以上に普遍性を持つことを本研究の成果は示唆し、普遍文法研究の上で重要な里程標となるものと考えられる。

(4) この他、程度そのものが数値化される場合の計量単位句や、言語との関連における自然数そのものの性格を明らかにする一連の研究を行った。

図書は、研究代表者が本プロジェクト以前からこれまでに積み重ねてきた日英語の計量単位表現についての成果をまとめたもので、厳密な形式分析があまりなされていないこの領域における今後の研究の進展に資するものである。そこで取り上げた現象以外にも、普通の数詞だけでなく、数詞相当としての「なん」や「数(すう)」が「なんにち」「すうじつ」などのように計量単位表現と組み合わせる様々な形態的変異が存在するなど、まだまだ取り組むべき問題が多い領域である。学会発表は、言及した問題の分析を提示したもので、数の素性以外にも和語か漢語かという語彙の種類における区別が形態実現の上で重要な役割を果たしていることを示した。和語と漢語の区別が数詞の形態において重要な要因であることは引用文献など、国語学畑でも従来から指摘されていたことではあるが、当該の学会発表はこれを日数表現に即して形態分析に取り入れたものである。

数詞と自然数の関係を取り扱った雑誌論文は、本プロジェクト以前に学会発表をしていた内容を活字化して国際雑誌に掲載したものである。これまで見落としていたヒルベルトの自然数理解をあらたな提案の中で位置づけることにも成功し、また、近年の発達心理学での成果を批判的に取り込む形でまとめた。学会発表では、序数詞が最上級とともに使われる場合 (*the third largest city*) の意味が、*every boy except Bill* の場合と同じように指定された個体を取り除いた結果できる集合をもとに計算されることを提案した。指定の個体をとりのぞくというこの意味上の操作が、雑誌論文で基数詞について提案している PF での削除に何らかの意味で対応しているのではないかと考えられるが、現在のところ、将来の課題として残っている。

(5) 学会発表は、程度修飾表現を収用する機能範疇の投射の上に主述関係 (predication) を担う投射が存在することを確認したものである。この点について引用文献が疑義を呈していたのであるが、日本語のデータを十分検討せずに論を進めていたために誤った結論を下していたことを本研究では指摘した。日本語がこの点に関し一番確実な証拠となるデータを提供していることが判明したとはいえるかもしれない。

(6) 以上、程度表現についてこれまで着目されていなかった現象を掘り起こし、あるいはこれまで関連が考えられていなかった現象を統一的に扱うための視点を提供することで、日英語の程度修飾の構造の全体像をつかむという目標に近づくことができたと言える。特に、サイズ修飾に関わる研究では、個別言語の個別語彙項目の特殊性として従来であれば片付けられるような事柄を普遍文法の観点から分析していくことの意義も示しており、程度修飾に限らず同様の研究が前進するきっかけになれば、さらに重要性が増すであろう。それと関連し、全般に、言語比較による分析の有用性を遺憾なく示すことができたと自負している。

< 引用文献 >

Carlson, Greg N., Amount Relatives, *Language*, vol. 53, 1977, pp. 520–542.

Beck, Sigrid, Sveta Krasikova, Daniel Fleischer, Remus Gergel, Stefan Hofstetter, Christiane Savelberg, John Vanderelst, and Elisabeth Villalta, Crosslinguistic Variation in Comparison Constructions. *Linguistic Variation Yearbook*, vol. 9, 2009, pp. 1–66.

Hohaus, Vera, and M. Ryan Bochnak, The Grammar of Degree: Gradability across Languages. *Annual Review of Linguistics*, vol. 6, 2020, pp. 235–259.

Szabolcsi, Anna, Two Types of Quantifier Particles: Quantifier-phrase Internal vs. Heads on the Clausal Spine, *Glossa : a journal of general linguistics*, vol. 3(1): 69, 2018, pp. 1–32. (DOI: <https://doi.org/10.5334/gjgl.538>)

Coppock, Elizabeth, and Elisabet Engdahl, Quasi-definites in Swedish: Elative Superlatives and Emphatic Assertion, *Natural Language and Linguistic Theory*, vol. 34, 2016, pp. 1181–1243.

Morzycki, Marcin, Degree Modification of Gradable Nouns: Size Adjectives and Adnominal Degree Morpheme, *Natural Language Semantics*, vol. 17, 2009, pp. 175–203.

Hackl, Martin. On the Grammar and Processing of Proportional Quantifiers: *Most* versus *More than Half*, *Natural Language Semantics*, vol. 17, 2009, pp. 63–98.

Acquaviva, Paolo, *Lexical Plurals*, 2008, Oxford University Press.

Lasersohn, Peter, Mass Nouns and Plurals, in *Semantics*, vol. 2, ed. by Klaus von Stechow, Claudia Maienborn, and Paul Portner, 2011, pp. 1131–1153. De Gruyter Mouton.

安田尚道 『日本語数詞の歴史的研究』、2015、武蔵野書院

Matushansky, Ora, 2019. Against the PredP Theory of Small Clauses, *Linguistic Inquiry*, vol. 50, 2019, pp. 63–104.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Watanabe, Akira	4. 巻 2
2. 論文標題 The Mass/Count Distinction in Japanese from the Perspective of Partitivity	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Glossa: a journal of general linguistics	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5334/gjgl.116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe, Akira	4. 巻 8
2. 論文標題 Amount Relatives in Japanese	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of the Eighth Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference	6. 最初と最後の頁 189-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe, Akira	4. 巻 64
2. 論文標題 Natural Language and Set-Theoretic Conception of Natural Number	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Acta Linguistica Academica	6. 最初と最後の頁 125-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1556/2062.2017.64.1.4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 渡辺明
2. 発表標題 Pred
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira Watanabe
2. 発表標題 Ordinals, Superlatives, and Linearization
3. 学会等名 7th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺明
2. 発表標題 名詞の最上級?
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akira Watanabe
2. 発表標題 Number Features and Numerals
3. 学会等名 49th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europea (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Akira Watanabe
2. 発表標題 Amount Relatives in Japanese
3. 学会等名 Formal Approaches to Japanese Linguistics 8 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 渡辺明他多数	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 未定
3. 書名 レキシコン研究	

1. 著者名 渡辺明他多数	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 388
3. 書名 極性表現の構造・意味・機能	

1. 著者名 Watanabe, Akira他多数	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Mouton De Gruyter	5. 総ページ数 722
3. 書名 Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	

1. 著者名 Watanabe, Akira他多数	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Mouton De Gruyter	5. 総ページ数 852
3. 書名 Handbook of Japanese Syntax	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----